



今回の新着ニュース：

- ・ 令和6年度 第1回
学校運営協議会の開催
- ・ 旧赤泊村長に学ぶ未来予想図

令和6年度コミュニティ・スクール始動！

令和6年度赤泊中学校区学校運営協議会がスタートしました！
赤泊中学校は、令和7年に南佐渡中学校との統合により今年度で閉校となります。赤泊中学校のラストイヤーとなる令和6年度、この赤泊中学校区を、学校運営協議会としても思い出に残る一年となるよう楽しく盛り上げていきたいと考えています。
地域の皆様、赤泊の宝である子どもたちのために、この一年もご協力やご支援をどうぞ宜しくお願い致します！

令和6年度 第1回学校運営協議会

4月23日(火) 赤泊小学校ランチルームにて、令和6年度第1回学校運営協議会を開催しました。本年度の会長・副会長につきましては互選と指名により、会長に海老名忠様、副会長に渡邊伸也様に決定いたしました。一年間宜しくお願い致します。

今回は来年度に向けての赤泊中学校区学校運営委員会の在り方と「南佐渡中学校区学校運営協議会準備委員会」の立ち上げについて話し合いました。3地区が一つの中学校区となるため、色んな課題が出てくることも想定しながら、お互いの地区にとって何が最良なのかを今後は丁寧に協議していきたいと思っています。

熟議については、昨年度第3回学校運営協議会から引き続き、「合同防災訓練」の具体的な計画について話し合いました。今年1月能登半島を震源とする地震が発生しました。佐渡でも震度5強の揺れや津波警報が発令され実際に津波も到達しました。この体験から、今年度の合同防災訓練は、参加集落を3集落に拡大し、また県の防災士会にも協力をお願いし、さらなる防災意識を高めるワークショップを計画しています。合同防災訓練を通じての学校と地域住民との地域連携を目的としながらも、児童・生徒のボランティア精神や助け合いの心を育むことも最終目標となるよう計画してまいります。

【協議事項】

- ①令和6年度会長・副会長の互選
- ②赤泊小・中学校運営方針の説明
- ③南佐渡中学校区学校運営協議会準備委員会について

【熟議】

令和6年度合同防災訓練について



昨年6/16合同防災訓練より

和を大切に・・・旧赤泊村長に学ぶ未来予想図

今回の第1回学校運営協議会で、海老名会長より委員の皆様にご紹介いただいた「全国市町村会随想（2001年11月5日）」に掲載の旧赤泊村 石塚英夫村長『和を大切に』を抜粋しご紹介いたします。

「和を大切に」

新潟県赤泊村長 石塚英夫

赤泊村は、佐渡島の南に位置し本土と対峙しています。明治34年に5か村が合併し現在の赤泊村となっており、今年が丁度100周年の節目の年に当たり、奇しくも21世紀の初年ということで、いろいろな記念行事を催し村民挙ってお祝いしています。

私は昭和47年村議から村長選挙に立候補するにあたり、「和」を大切に村にと訴えて参りました。そのことは今も機会あるごとに村民の皆さんにお話しています。

「和」の意味を調べてみますと「やわらぐ、やわらげる、なごむ、なごやか」などが出てきます。共和、親和、調和、平和等々和のつく言葉は沢山あります。また日本を指す「大和（やまと）国」「倭（わ）」もそうでありまして、十七条憲法に使われて有名になった「和を以て貴しと為す」礼記の言葉が和を集約しているようにも思えます。

「世の中は、人々が仲よくすることが大切である」真にその通りだと思うのです。

しかしながら現実にはなかなかうまくはいきません。戦後のめざましい経済発展、科学の進歩から人類は月へも行き、ダイオード、ICの発明から今や瞬時に世界の情報を得ることのできるIT技術の進展、バイオテクノロジー、果てはクローン技術の域にまで至っています。反面そのような技術の進歩に伴い弊害も起きていると思うのです。子供（大人もそうなのかもしれませんが）の遊びの形態も大きく様変わりし、友達なしでも自分一人で遊ぶテレビゲームや、インターネットなどでバーチャルリアリティの体験、人対人の会話ではなく、あらかじめ作られた機械との会話になってしまって、そこでは通常推察できる相手の感情（それは相手の顔色でも、また語気でもあると思うのですが）が読みとれない世界だと思うのです。

日本の子供達の学力で、最近語学力と数学の低下が危惧される状況にあることを何かの機会に聞きましたが、当然のこととも思えます。意味を充分理解しなくとも平仮名で打ち込めば瞬時に漢字に転換してくれますし、理屈がわからなくても算式に数値を入れればこれもまた瞬時に答が出てくる、そのような時代になってきています。確かにコンピューターというすごいものが造られ、その恩恵に浴して経済が発展してきたことは事実であります。それは使うものであって、使われるものではないことを肝に銘じたいものです。

地下鉄サリン事件の様な凶悪なクーデター事件から無差別殺傷事件、性犯罪、児童虐待等々想像もつかない悲惨な事件が相ついで起きています。この原稿を書いている時もアメリカでの国際貿易センタービル、国防総省へのテロ行動という凶悪悲惨な事件が伝えられています。「人間は考える葦である」以上愚かな道へは進まないであろうが、憂慮すべき状況が世界各地に起きていることは事実です。私どものような田舎の村では幸いこのような事件はありませんが、過疎高齢化の進むなか、地域コミュニティは以前より薄らいでいることは実感されます。

平成元年度からのふるさと創生事業で、村では「民話の里づくり」に取り組んで参りました。幸い自主活動グループも次々に誕生して、肩肘張らずにできることから実践し、地域づくりを楽しみながらその輪が広がってきています。また、草の根的な国際交流として毎年行われてきた、アジア文明の原流ともいべきインドの優れた絵画、音楽、舞踊、食文化等の紹介、公演や、更にはニュージーランド、オーストラリア、パプアニューギニアなども含めた原住民族との交流・親睦などが今年で丁度10年目を迎え、村民が楽しみにしているイベントに育ってきています。

「過疎にはなっても、心の過疎になってはいけない」が私のモットーであり、自分を愛し、隣人を愛し、家族を愛し、地域を愛する心、和を大切に人、そういう村づくりを目指して今後も努力していきたいと思っています。

CSディレクター岩崎の

ホッとコラム

今回は、故石塚英夫村長の随想を掲載いたしました。私は読んでいて、まるで今の赤泊、佐渡・・・いや日本の今を20数年前の当時想像していたのだろうか？と思ってしまうほど、心に刺さるメッセージでした。地域コミュニティとは何だ？と問う日々、理屈で考えるものでなく人との「和」が基本にあるということ。心が穏やかで豊かな地域は、その先の未来も人々が住み続けるのではないのでしょうか。そんなことを感じました。

最後まで「カニポン通信2024第1号」をご覧ください、ありがとうございました！